1950年代前半の高畠亀太郎（下）

——政治面について——

川　東　竫　弘

目　次

はじめに
第1章　1951年
第2章　1952年
第3章　1953年
第4章　1954年

はじめに

前稿[1]で，1950年代前半（1951～54年）の高畠亀太郎の家業面について見ました。家業の中心は木工会社で，朝鮮戦争の勃発による戦争景気で，日本経済の景気が回復し，亀太郎の木工会社も大過なく過ぎていました。また，木工会社以外に山林投資や不動産業（土地建物の売買）にも積極的に乗り出していました。しかし，53年までは景気はよかったのですが，54年に日本経済が不況に陥り，亀太郎の家業も不況・不振です。また，税金面でも増税でイロイロ苦労していました。

さて，本稿では，1950年代前半（1951～54年）の亀太郎の政治活動面について見ることにします。1946年以来公職追放されていた亀太郎は，51年6月追放が解除され，晴れて政治活動ができるようになっています。そして，以降，宇和島の政治・選挙に関わっていくことになります。以下，追放解除下の亀太郎の政治活動について見ることにします。

1）拙稿「1950年代前半の高畠亀太郎（上）—家業面について—」（「松山大学論集」第13巻第2号，2001年6月）。

第1章　1951年

1951年(昭和26)，亀太郎68歳の年です。本年は一斉地方選挙の年です。4月23日に市長選挙と市会議員選挙，4月30日に知事選挙と県会議員選挙がありました。亀太郎はこの選挙時にはまだ公職追放の身であり，選挙には直接かかわっていません。しかし，選挙には関心があり，日記に選挙関係の記事がいくつか記されています。以下，各種選挙ごとに見てみましょう。

(1)　宇和島市長選挙・市会議員選挙（4月23日，5月6日市長選再投票）

4月23日に，戦後2回目の宇和島市長選挙と市会議員選挙がありました。この宇和島市長選挙では，自由党側からは現職の国松福祿(自由党)と新人の佐々木饒（自由党，元県会議員）が立候補し，自由党は分裂しました。他方社会党側は前参議院議員の中平常太郎（47年～50年参議院議員）を立てました。

亀太郎はまだ公職追放中であり，この選挙に関係していません。したがって選挙関係の記事は少なく，投票前日の4月22日の記事「議員や首長選挙の期日が切迫したので，両三日来自動車にスピーカーで候補者の宣伝に廻るもの相次ぎ，市中賑やかである」とか，投票日の23日の記事「本日は市長及び市会議員の選挙が行われるので，和霊小学校の投票所へ行って夫れぞれ投票し（た)」に止まっています。また，亀太郎の市長選への態度は不明ですが，4年前の市長選では国松支持でしたので，おそらく今回も国松であったと思われます。

宇和島市長選挙の結果は，社会党の中平常太郎1万0,144票，国松9,435票，佐々木8,703票の順で，中平が1位でした。しかし，中平は法定得票に達せず，2位の国松との決選投票となりました。投票翌日の24日の日記に「午后市役所の税務課等へ行き，後，丸之内和霊社前の広場で選挙開票の張出しを看る。市長選挙の開票は五時頃に判明し，中平常太郎君一〇,一四四票，国松福祿君九,四三五票，佐々木饒君八,七〇三票であったが，中平君法定数に達せぬので，中平，国松の決選投票が行われることとなった」とあります。

そして，5月6日に中平・国松候補の決選投票があり，翌7日に開票され，中平が1万4,868票，国松が1万0,993票で，約4,000票差で中平が当選しました[2]。「市長決選投票選挙の結果は，本日の開票にて午后一時過ぎには全く判明し，国松前市長より約四千票の差を以て中平常太郎君が多数となり，宇和島市長に当選した」。宇和島市初めての社会党市長の誕生です。

なお，4月23日の宇和島市会議員の選挙についても記事はほとんどなく，投票翌日の24日の日記に「市会議員の開票は夜遅くまでかゝって当落決し，藤田定吉君等の三十名当選し，松浦輝義君もビリより二人目で当選した。婦人候補者は三名共落選し，共産党の二名も極めて少なき票数で，社会党の二名と共に落選となった」と記されている程度です。

(2) 知事選・県会議員選挙（4月30日）

本年の県政界の最大の焦点は，4月30日の県知事選挙でした。すでに前年末に青木（重臣）知事派の井部栄治らの県議が現職の青木重臣を推し，他方反青木派の白石春樹らの県議が政財界の長老佐々木長治を担ぎ，自由党（この時の支部長は代議士の高橋英吉，幹事長は県議の山本友一）が事実上分裂しました。それに対し，社会党・民主党らが旧松山藩主の末裔で，参議院議員の久松定武を担ぎ，3候補が出そろっていました。

51年に入り，知事選は激しい火花が散っていました。青木派と佐々木派は自由党の公認争いで泥仕合を演じました。そして，告示日の4月3日になって漸く，吉田茂首相の裁定で青木が公認となりました。しかし，それに不満の反青木派県議達（白石春樹，立川明，向井三治ら14県議）は，4月4日に集団脱党を行い，激しい対立となりました[3]。

亀太郎はこの知事選にも勿論関係していません。態度も不明です。ただ，投票日の4月30日に「午前九時和霊校の投票場へ行って知事と県会議員の選挙を

2)『愛媛新聞』1951年5月8日付け。
3) 今井琉璃男『愛媛県政二十年』66～80頁。

なし，後，中村へ行く。純一君明日出発帰京の筈である。午后安喜等へ行き，夕方田中ホテルの青木事務所へ寄った」とありますから，おそらく主流派の青木支持であったと思われます。なお，甥の中村純一代議士（1949年の1月の総選挙で当選）は青木支持のようです。

5月1日に知事選の結果が判明しました。久松28万0,809票，佐々木27万8,169票，青木14万7,863票で，久松と佐々木の大接戦の末，久松がわずか2,640票の差で当選しました。自由党公認の青木は惨敗でした[4]。1日の日記に「昨日の選挙開票の結果は午后三時頃迄には大勢判明したが，結局知事選挙は二八〇，八〇九票で久松定武氏当選し，自由党の二候補佐々木長治氏は二七八，一六九票，青木重臣氏は一四七，八六三票で共に落選となった」とあります。自由党分裂で，久松が漁夫の利を得た恰好です。

知事選と同時に県会議員選挙（定員53名）が行われました。宇和島選挙区（定員2）では，山本友一（盛運汽船社長，自由党の県支部幹事長，前，青木派），向井三治（愛媛機帆船社長，無所属，前，佐々木派），中川千代治（中津屋社長，無所属，新），中畑数一（前市会議員，自由党，新）の4人が立候補し，山本8,800票，向井7,641票，中川6,679票，中畑2,849票で，前県議の山本と向井が当選しています[5]。5月1日の日記に「県議は宇和島市では向井三治，山本友一の前議員当選し，北宇和郡は主に新顔で水谷，清家の旧議員は落選した」とあります。県全体では，自由党23，社会党7，民主党2，無所属21で，無所属の大半は白石，向井，立川明ら自由党を脱党した佐々木派でした。久松の純粋与党は社会・民主の9名しかありませんでした。

久松県政が発足したものの，与党は少数のため，自由党脱党組の佐々木派の県議（白石ら）と提携して行くことになります。選挙後，久松と白石との接触がはじまり，5月13日白石らは清和クラブ（会長向井三治）を結成し，久松与党となっていきます。副知事には社会党の推す羽藤栄市（四国電気通信局長），

4）『愛媛新聞』1951年5月2日付け。
5）『愛媛新聞』1951年5月2日付け。

出納長には清和クラブの推す戒田敬之（県労働部長）がなっています。[6]

なお，久松が知事に当選したため，5月に参議院の補欠選挙が行われています。自由党から玉柳実（旧内務官僚，愛媛県農地部長，経済部長等を歴任）が出て，無投票で当選しています。

(3) 公職追放解除関係

1951年6月20日，政府（吉田内閣）は第1次追放解除を発表しました。中央指定解除が2,960名，地方指定解除が6万6,000余名です。中央指定では，D項該当の大政翼賛会郡市町村支部役員113名，翼賛壮年団郡市町村支部役員93名，G項該当の言論報道界402名，経済界653名，昭和17年の総選挙で推薦をうけたもの211名，帝国在郷軍人会分会長764名，大日本武徳会役員725名です。これにより，石橋湛山・三木武吉・河野一郎ら政財界人の実力者の追放解除がなされました。本県では44名です。翼賛議員であった亀太郎もこれにより追放解除です。[7] 20日の日記に「先般来頻りに予報されて居る公職追放者解除は，本日午前十時其の大量解除の第一回分を政府より正式発表あり。正午のラヂオニュースで松山から本県分を放送したので，予の追放解除も明瞭となった。即ち中央指定の推薦議員として本日解除，地方指定の大政翼賛会宇和島市支部長としての分も両三日中県で解除と決定したので，午后市警察の山本君が来訪，この旨の通知を受けた。諸方より祝辞を寄せ，又来訪の人もあり，夕方発行の地方新聞には孰れも之れを掲載して，予等の写真や談話をも出している」とあります。

翌6月21日に各方面からお祝いが来ています。「追放解除にて祝詞，祝電来り，祝の品を贈られる人もあった。東京からは自由党の増田幹事長，広川弘禅氏等からの祝電もあった。牧野君，春日屋君来訪。夕方までには鵜木，丸島，金井，其の他の諸君祝意を述べに来訪。本日附けの大阪，松山の新聞までも予

6)『愛媛県議会史　第5巻』596～598頁。今井『愛媛県政二十年』82～85頁。
7)「愛媛新聞」昭和26年6月21日付け。

等の解除を報じて居る」。7月6日には，吉田茂首相からも祝辞が来ています。「内閣総理大臣官房から公職追放指定理由（昭和十七年総選挙の推薦議員）取消書，自由党総裁吉田茂氏から解除の祝詞が到着した」。

7月2日に，政府は地方指定分（翼賛会，翼壮会，在郷軍人の郡市町村役員）の追放解除を発表しました。解除者総数は6万6,025人です（6月30日に遡って解除）。愛媛県では1,600余名で，これにより，役員をしていた元市町村長・県議級のメンバーが解除されました。例えば，上田宗一（元宇和島市長），桂作蔵（元近永町長で代議士），赤松勲，西一等の元県議等々[8]。亀太郎も大政翼賛会の宇和島支部長をしていましたので，こちらの方でも追放解除です（8月2日の日記に「地方指定の公職追放（大政翼賛会市支部長，同支部協力会議長の分）解除の通知書（六月三十日付久松知事名）到着した」とあります）。

地方有力者の公職追放解除があい続きましたので，7月22日，愛媛の自由党（高橋英吉支部長，山本友一幹事長）が主催して，松山市道後公会堂で追放解除者招待懇親会を開いています。亀太郎も晴れてこの懇親会に出席し，挨拶しています。「午前七時十分の准急で出発。松山へ行く。十時着松，……午后二時から道後公会堂で催される自由党愛媛支部の追放解除者招待懇親会に出席した。行ってみれば旧知の顔が多く，元代議士組には予の外，岡本，毛山，稲本，桂の諸君。元県会議員級には赤松，西，黒田，宇都宮，吉本，加藤，相田，池田の諸君と現職の県議，来賓に佐々木長治，玉柳実の諸氏もあって，百余名に及び山本友一幹事長の挨拶に次いで，佐々木氏の祝辞，被招待者側を代表して予の謝辞の後，宴に移ったが，一同なごやかな気分で盛会であった。武田正俊君の配慮で，妓二十名の余興も加わり，老妓お友の懐旧談などで賑やかに五時過散会」。

8月6日に，政府は第2次追放解除を発表し，遅れていた鳩山一郎ら各界1万3,904名が公職追放解除になっています。

---

8)「愛媛新聞」昭和26年7月2日付け。

8月22日には，佐々木派の立川明県会議長主催の追放解除者招待会が松山で開催され，それにも亀太郎は参加しています。「午前七時十分の汽車で出発，松山へ行く。……午后二時から道後公会堂で開かれる立川県会議長主催の公職追放解除者招待会に出席した。来会者は県内選出の元代議士，元県会議員等主客七十名で，河上哲太，佐々木長治，羽藤副知事の顔もあり，旧知新人取交ぜて懇談の好機会であった」。

8月28日に中央でも追放解除の祝宴会がありましたが，それには欠席しています。8月27日「吉田自由党総裁より，追放解除者招待祝宴を明二十八日首相官邸で催すに就き，案内状に接したが，遠路ゆえ欠席することにした」。

この前後から，公職追放解除組の元県議の有力者達（赤松勲・相田梅太良・堀本宜実・西一・石川一朗ら）が中心となり，先の知事選挙で分裂した愛媛の自由党両派に接触し，一本化工作を行っています。それが功を奏し，十二月に漸く一本化することになりました。[9)]

1951年9月，サンフランシスコで講和会議が開かれています。占領状態に終止符を打ち，日本は一応「独立国」となりましたが，アメリカを中心とした西側陣営との片面講和でした。これにより，日本はアメリカ中心の国際的反共体制に組み込まれました。さらに同時に安保条約を締結し，米軍が引き続き日本に駐留することになりました。この安保は周知の如く，アメリカが日本に軍隊を駐留する権利を有するが，日本の安全に対する義務は負わない片務条約でした。この会議のことが日記にも簡単に触れられています。9月9日「桑港における対日講和会議において本日（米国時間8日）講和条約調印，日米安全保障条約も調印された旨ニュースがあった」。

1951年を回顧して，亀太郎は次のように述べています。「此一年を通じて身辺に大なる変りはなかった。六月に公職追放解除となり，又木工会社の事業も大過なく経営を続け来って，平凡に経過した」。

---

9)『愛媛県議会史　第5巻』598～599頁。今井『前掲書』88～90頁。

第2章　1952年

1952年(昭和27)，亀太郎69歳の年です。経済面の家業は順調です。政治面で，前年6月の公職追放解除で政治活動が可能となり，本年に行われた総選挙（10月1日）で，早速甥の中村純一の再選に向けての選挙応援をしています。

(1)　愛媛政界関係

1952年（昭和27）1月8日，前年（1951）4月の知事選で分裂していた自由党愛媛県支部の再建大会が，松山市道後公会堂で開催されました。この大会に8人の自由党代議士(高橋英吉，中村純一等)，参議院の玉柳実，脱党組の県議（白石春樹ら)，残留組の県議（井部栄治ら)，追放解除者の有力政治家（砂田重政，堀本宜実，赤松勲等)，佐々木長治ら300名が参加し，赤松勲が再建実行委員会を代表して経過報告をし，支部長佐々木長治，副支部長石川一朗，玉柳実，西一，幹事長堀本宜実，総務会長赤松勲，政調会長沖喜予市を選出しています。この自由党愛媛県支部の新役員は，両派統一に尽力した追放解除組の元県議達（堀本宜実，赤松勲，石川一朗，西一等）が中心で，現職県議の両派の実力者，佐々木派の白石春樹，向井三治，青木派の井部栄治，山本友一らは入っていません。[10] この大会には亀太郎は出席していません。

さて，この自由党一本化により，自由党脱党派県議が久松与党から抜け，久松県政の与党はまた少数となっています。そして，その愛媛社会党は左右の対立が激化し，5月に左右に分裂し（左派は三橋八次郎・安平鹿一・井谷正吉ら，右派は宮崎忠義・中村時雄ら)，混迷です。[11]

(2)　中央政界関係・総選挙（10月1日）関係

1952年4月28日，前年9月に調印されたサンフランシスコ講和条約が発効

10）今井『前掲書』91頁，『愛媛県議会史　第5巻』599～600頁。
11）今井『前掲書』93頁。

しました。日記にも触れられています。「本日午后十時半を以って米英等諸国との講和條約発効し，六年余に亘る占領を解消して，日本は再び独立国となった。夜十一時過まで之れに関する内外祝辞のラヂオ放送を聴いた」。

さて，52年の国内政界では，メーデー事件（5月1日），菅生事件（6月2日），吹田事件（6月24日）などが起こり，それに対し，占領軍の後楯がなくなった吉田は労働攻勢，左翼攻勢に強圧をもって対処すべく，破壊活動防止法案の通過を図りました（7月4日衆議院通過）。この吉田首相への批判が強まります。また，公職追放が解除され，自由党に復帰した鳩山一郎一派らが吉田に政権委譲を要求し，自由党内部で，対立が激化しました。[12)]

8月26日に第14回通常国会が招集されましたが，翌々日の28日，吉田首相は自由党内の反吉田派・追放解除組の先手を打って，彼らの選挙準備が整わないうちに衆議院の解散をくわだてました。いわゆる「抜き打ち解散」です。28日の日記に「正午過の臨時ニュースで本日議会解散となり，総選挙は十月一日に行うことに決定と聴く」とあります。

さて，総選挙です。自由党は，吉田派と鳩山派に分裂のまま，総選挙（第25回）に入っています。[13)] 社会党も左右に分裂したままの総選挙です。9月5日が公示，10月1日が投票です。

愛媛県の第1区（定員3名）では，自由党が4人（現職の関谷勝利，川端佳夫，新人の郷野基秀，他に現職の大西弘），改進党が1人（新人の菅太郎），社会党左派が1人（新人の田辺勝正），右派が1人（中村時雄），共産党が1人（門屋功），また，追放解除組の武知勇記（旧民政党）が日本再建連盟から立候補し

12）鳩山一郎は1951年の8月6日の第2次追放解除により政界に復帰した。鳩山ら追放解除組は占領期以来の吉田政治の対米追随姿勢を批判，占領政策の行き過ぎ是正，再軍備，日ソ国交正常化などを主張していた（内田健三ら編『日本議会史録4』267～269頁）。この頃（1952年8月）の自由党内の吉田派は140名，他方鳩山派が119名で勢力伯仲していた（升味準之輔『日本政治史4』186～187頁）。

13）解散時の政党・会派は，自由党285名，改進党67名，日本社会党右派30，左派16名，日本共産党22名（『議会制度百年史』609頁）。改進党は1952年2月民主党と追放解除になった旧民政党の政治家達で結成。総裁重光葵，書記長三木武夫（升味『前掲書』187～191頁）。

ています。乱戦です。第2区（定員3）では自由党が3人（現職の小西英雄，越智茂と追放解除組の砂田重政），改進党が1人（現職の村瀬宣親），社会党左派が1人（安平鹿一），右派が1人（宮崎忠義），共産党が1人（宇都宮周策）立候補しています。亀太郎の属する第3区（定員3）では，自由党が5人（現職の高橋英吉，薬師神岩太郎，中村純一，他に追放解除組の今松治郎，元代議士明礼輝三郎），改進党から1人（毛利松平），社会党左派が1人（井谷正吉），共産党が1人（清水省三），協同党から1人（清水栄）が立候補しています。3区は特に乱立，大乱戦で，自由党の各候補の地盤は高橋が西宇和郡，薬師神と中村が宇和島市，今松が北宇和郡，明礼が喜多郡となっています。また，県下の候補者のうち，武知（翼賛議員），菅（内務官僚，満州国国務院治安部理事，大日本翼賛壮年団総務），砂田（元政友会幹事長，大政翼賛会政務調査部長），今松（内務官僚，内務省警保局長）の4人が公職追放解除組です。[14)]

亀太郎は甥の自由党候補者中村純一の応援です。以下，1ヵ月余の長い選挙応援活動が続きます。

8月29日以降，関係者と協議，応援依頼しています。29日「夜，近森君，武田君来訪。選挙対策の話があった。豫て立候補準備事前運動に怠りなかった中村純一君は，来月三日東京出発，選挙区へ帰るとの電報があった。十時頃笠松君，松浦君来訪」。8月31日「バスで吉田町へ行って中村のために水谷前県議を訪問し，正午過帰宅した。午后近森，二宮其他へ行って夕方帰宅」。9月3日「午前九時から柴田君と共に自動車で石応へ行き，向井三治君を訪ねて，十一時帰った」等。

9月4日，選挙事務所を開設しています。「午后駅前えびすや旅館に中村の選挙事務所開設に就き，行って武田君などに会った。夕方帰り，古谷君来訪」。

9月5日，中村純一が帰国，協議しています。「午后中村選挙事務所へ行く。夕七時中村純一候補東京より来着。先着の稲子，道子さん其他事務所の人々と

14)『愛媛県議会史　第5巻』601頁。

共に駅へ出迎え，後，中村で協議した」。

9月6日，市会議員の上田亮三に応援依頼し，また，向井三治県会議員等が応援に来ています。「朝八時中村純一候補と共に上田亮三君を訪ふて積極的援助を依頼し，共に選挙事務所へ行って人々に接した。午后一旦帰宅。夜又事務所へ行ったが，県議向井三治君も中村援助に決して，夫妻で乗込み，赤松勲君，浅田県議等も来り会して，打合せをした。十一時帰宅」。

9月8日，八幡浜に応援依頼に行っています。「朝七時五分の列車で柴田君と共に八幡浜へ出張する。八時過着し，野本吉兵衛，青木良作の二氏を訪問。午后堤，河野公四郎両君方へ寄って，三時七分発の列車で帰宇した」。

9月9日，関係者と協議しています。「正午中村で近森，赤松と中村候補を会して根本策を協議し，午后事務所で向井，赤松，上田の諸君とも再び此件を打合せした。其他多く事務所にあって十一時帰宅した」。

9月10日，八幡浜に又行っています。「朝七時五分の列車で栄月の松花君と共に八幡浜へ行き，先づ市議野口君を訪ねて，其案内で出石寺住職神山締鑁氏に地四国のお寺で会ふた。十時三十九分発の列車で正午宇和島へ帰り，事務所へ行った」。

9月12日，立会演説会を傍聴しています。「七時明倫校に於ける各候補の立会演説会を傍聴し，後，中村で近松，柴田両君と会見，又事務所へも寄って十一時半帰宅」。

9月13日，南予地方へ行き，選挙演説の応援です。「午前八時十分発の急行バスで選挙事務所の澤田君等と共に御荘へ出張する。十一時平城下車，山口酒店で少憩の上，山本伊方君，県議浅田仙吉君等と共に自動車で東外海の久良へ赴く。候補者中村君も他の自動車で来り会し，同地漁業協同組合の楼上で午后一時半から演説会を開した。聴衆七十名。予も応援演説をして五時閉会。帰途は中村の自動車に皆が乗って道々路上演説をして，深浦経由，七時一本松村増田に着し，七時公民館で演説会を開催した。聴衆二百五十名で各弁士熱弁を振い，十時過に終了，同地いろはで夕食の上，一行は平城へ帰り，予は同旅館に

一泊した」。そして翌日帰宇しています。

9月15日も南予へ行き，演説です。「午前八時十分の急行バスで平城へ行く。十時過着し，山口で打合の上，正午から浅田君其他と南内海村中浦へ出張して，午后二時から学校で演説会を開いた。五時平城へ帰り，更に内海村柏へ出張。七時半から小学校で演説をする。聴衆百三十名，あとで座談会もあって平城へ自動車で帰り，着いたのは十二時であった。老松旅館に一泊」。

9月16日も南予で応援演説です。「滞在旅館で他の弁士の原稿を作りなどし，又選挙関係に人に会った。風邪を引いたのか，午后から少し熱があったが，七時からは予定の如く城辺町へ行って小学校講堂の演説会に出席した。聴衆二百五十名。十時に了って旅館へ帰った」。

9月17日は，宇和島に帰り，熱があるにもかかわらず応援です。「午前八時半平城を立ち，急行バスで宇和島へ帰った。会社へ顔を出し，午后伊予銀行，信金へ行き，又中村選挙事務所へ行って一旦帰宅。丸島医師を招いて下熱の注射をして貰った。七時に事務所へ行き，今夜は市内二ヶ所で演説会を開くので，予は先づ泰平寺の会場へ行って五十分演説した後，龍光院下保育園の会場へ廻り，候補者の跡を受けて約一時間演説したが，共に盛会であった。十時事務所へ帰り，打合の上，今後は候補者の出席出来ぬ予定の演説会は，各地共開催計画を打切って，マイク附き自動車による候補者の車上演説に集中することにした。十一時過帰宅」。

9月18～21日は宅用ならびに選挙事務所等に行っています。

9月22日，関係者と協議し，また立会演説会を傍聴しています。「午前八時上田君方で同君及び柴田君と会した。……午后多く事務所に居り，又武田博君を訪ひなどして後，七時から明倫校に於ける中村候補等の立会演説会の傍聴に行った。時間迄に中村君が出張先から帰らぬ場合其代理としての用意もしたが，本人間に会ったので夫れには及ばなかった。会了って事務所に引揚げ，十時に帰宅した」。

9月23日～25日，宅用ならびに選挙事務所に行っています。また，今松治郎

候補の演説会も聴いています。

9月26日には，北宇和郡松丸方面に応援演説に廻っています。「午前八時事務所へ行き，中村候補と共に選挙専用の小型トラックに乗って松丸方面に出張する。十時から松丸，吉野，豊岡，興野々，奥野川の各部落をマイクロホンで連呼して廻り，時々要所で街頭演説をして，午后一時に中村は松丸小学校の立会演説に出席して，更に八幡浜地方へ転進し，予は中村と別れ，別のマイク附きオート三輪車に運動員数名と同乗し，旗標を立てゝ，目黒部落へ向かった。路面悪き為め，途中屢下車して難行を続けたので，予定より遅れて五時目黒に到着。マイクで一周の上，四っ辻の要所に聴衆百余名を集めて約三十分街頭演説をした。六時半同地発，路の良い高知県大宮廻り津之川，江川崎経由の大迂回行路を取って，夜十時に漸く吉野に到着した。宇和島に電話し，松丸，土居旅館へ帰り，夕食の後，予は事務所より迎への乗用車に乗換えて十一時半同地出発，十二時過家に帰った」。

9月27日には，北宇和郡日吉村に応援演説に行きます。「朝九時事務所へ行き，十時十分発の国鉄自動車で日吉村へ向かった。正午同村鍵山に到着。旅館で昼食し，社会党の井谷候補事務所へ挨拶に寄った上，午后一時から開かれる小学校の立会演説会に中村候補の代理として出席した。聴衆三百五十名。先づ共産党の清水候補，次いで予，次に井谷候補夫々政見を発表し，予は中村に代わりて自由党の政策を布演し，好評であった。三時十分発の国鉄バスに乗って五時宇和島に帰り，事務所と赤松勲君方へ寄って八時帰宅した」。

9月28日には，宇和島市内で街頭演説をしています。「午前選挙事務所と中村へ行き，又佐々木饒君逝去に就き，十一時同家を弔問した。午后事務所より中村候補，道子さん其他と小型トラックに同乗して出発，スピーカーの連呼で市内を行進し，追手通角其他数ヶ所で街頭演説をした。七時候補者を和霊校の立会演説に送って後，尚，予，応援隊長となって市内行進を続け，九時に切上げて十時に帰宅した」。

9月29日も街頭演説や立会演説をしています。「午前午后共，候補者等と共

に市内をトラックで行進し，処々で街頭演説をした。来村までも行って，夕方事務所へ帰り，夜七時より融通座に於ける中村候補政見発表，個人演説会に臨んだ。聴衆千五百名の満堂で定刻開会。柴田君開会の辞を述べ，二，三弁士の後，予登壇「善良の市民として政戦に立つ」の題下に応援演説をした。追放解除後融通座では初めての演説で六年振りであったが，主として吉田内閣の政策と池田財政を論じ好評であった。候補者も能く所見を布演して，九時半盛会裏に閉会。中村と事務所へ寄って十時過帰宅した」。

9月30日，投票日の前日です。宇和島市九島や市内で応援演説です。「朝七時過から事務所へ行って候補者等と共に九島の石応へ行き，島の分へも渡って街頭演説をして十時内港へ帰り，引続きトラックで市内行進と演説をした。午后二時一寸会社へ出て伊予銀へも行ったが，三時半から更に行進隊に加はって，大浦，赤松や朝日町，御殿町を廻り，夜七時から候補者と共に大浦公会堂へ行って，演説会を開いた。聴衆二百，熱演をして九時半了り，十時帰宅した」。

10月1日，投票日です。「衆議院議員選挙の当日なので，午前九時投票所和霊校へ行って投票をした。……午后中村で柴田君などゝ会い，事務所へも行った。中村候補形勢は最初不振であったが，向井参謀等の努力で次第に好転し，選挙期日直前には運動員も相当緊張して居た。八時帰宅」。

10月2日，開票日です。県下の結果は，第1区は，関谷（自由），武知（日本再建連盟），菅（改進党），第2区は，安平（社会党左派），砂田（自由），越智（自由）が当選です。第3区は，今松（自由）4万7,009票，高橋（自由）3万5,477票，明礼（自由）3万4,807票で，この3人が当選し，以下，井谷（社会，左派）3万4,194票，薬師神岩太郎（自由）2万9,193票，中村純一2万4,365票，毛利松平（改進）1万6,168票，清水省三（共産）2,845票，清水栄（協同）2,509票でした。中村は当選ラインに遠く及ばず落選でした。党派別では，自由党6，改進党1，社会党左派1，再建連盟1となっており，自由党は前回の8から6に後退です。社会はゼロから1への回復です。また，特徴として，現職組の当選は関谷，越智，高橋にとどまり，武知，菅，砂田，今松の追

放解除組がいずれも完勝し，他の現職組が多く落選したのが目立ちます。

中村純一は落選でした。落胆しています。10月2日の日記に「午前九時渡辺代書事務所と武田公證人役場へ行って後，中村と選挙事務所の双方へ行つたが，郡部開票の情報は順次到着。然るに形勢意外に不利を極め，各郡とも得票不足の大違算を来して，午后一時には明かに落選と極った。夕方まで事務所に居ったが，候補者夫妻を始め，幹部連，運動員の落膽は誠に悲壮であった。今松候補の進出著しく，為に薬師神君も落選，宇和島市には代議士がなくなつた。今松君最高点の四七〇〇九票，西宇和地盤の高橋英吉君三五四七五票，喜多郡地盤の明礼輝三郎君三四八〇七票で夫々当選し，次点は井谷正吉君三四一九四票で惜敗し，薬師神君二九一九三票，中村君二四三六五票であった。全国的には矢張り自由党が多数で二百四十一名の過半数を占め，共産党は一名も出なかった。七時事務所より帰宅し，ラジオの選挙報道を聴いた」とあります。

全国的には，自由党240，改進党85，社会党右派57・左派54，労働者農民党4，協同党2，日本再建連盟1，日本共産党0，諸派4，無所属19となっています。自由党の後退，改進党と社会党の回復・躍進，共産党の惨敗，また，自由党における公職追放解除組の大量当選が特徴です（自由党当選者の約3分の1）。[15)]

なお，この選挙で中村陣営は市会議員の上田亮三が逮捕されるなど選挙違反をしました。亀太郎はその対策もしています。10月12日「中村で二宮卓，武田博の両弁護士に会って，先日来中村関係に起こって居る選挙違反事件に就て協議した。五時帰宅し，夜も此件で近森君を訪ねなどした」。10月23日「午后中村，近森等へ行き，又中村の選挙で違反事件に係り，収容中の上田亮三君宅を訪ひなどした」。11月3日「予は先日来中村の選挙関係で違反に問はれ，宇和島の地区警察署から八幡濱署へ廻って居た上田亮三君が昨夜釈放，帰宅に就き，訪問の上様子を聴きなどした」等。

---

15)『議会制度百年史　院内会派編衆議院』611頁。内田健三ら編『前掲書』273～275頁。

さて，総選挙で自由党は後退ですが，過半数を占め，10月24日，引き続き吉田茂が首班指名され，30日第4次吉田内閣が発足します。しかし，自由党内部の反吉田派の強硬派達（安藤正純，三木武吉ら）は，10月24日は自由党民主化同盟を結成して，対立が次第に激化していきます。

第3章　1953年

1953年（昭和28），亀太郎70歳の年です。総選挙が終わったばかりですが，本年3月，吉田首相が国会で「バカヤロー」と暴言し，国会解散があり，4月19日にまたまた総選挙（第26回）となっています。また，その直後の4月24日には参議院選挙（第3回）が行われています。本年も選挙の年です。ただ，総選挙では亀太郎の甥の中村純一が出馬しなかったため，大した選挙活動はしていません。なお，愛媛県の政界は，衆議院と参議院選挙で自由党が敗北し，その腹いせで，革新支持の久松知事を追い詰め，副知事の羽藤栄市の首をとり，屈伏させ，県政が革新から保守に転換します。

以下，本年の亀太郎の政治活動について見て見ましょう。

(1)　衆議院選挙（4月19日）

1953年の中央政界は大荒れです。2月28日，衆議院の予算委員会で社会党の西村栄一が吉田首相の楽観的な国際情勢論を質している質問中，吉田首相が興奮し，「無礼なことを言うな」「バカヤロー」と暴言しました。そこで，3月2日，衆議院に吉田首相の懲罰動議が出され，自由党内の「民主化同盟派」と広川弘禅派が欠席したため，賛成192，反対163で同動議が可決されました。この懲罰動議の可決に吉田茂は怒り，同日農相の広川を罷免しました。愛媛選出の越智茂（広川派，厚生政務次官）も罷免です。

勢いに乗った野党側は，3月14日に「吉田内閣不信任決議案」を提出し，趣旨説明の中で，吉田首相を占領軍のイエスマン，独裁者，官僚を溺愛する性格的偏執などと痛撃しました。そして，この決議案に三木武吉・石橋湛山・河野

一郎ら自由党の民主化同盟派議員22名が賛成に回ったため，229対218で可決されてしまいました。同日，三木らは自由党を離党し，「分党派自由党」（代表三木武吉）を結成しています。

またまた怒った吉田は，直ちに衆議院を解散しました。3月14日の日記でも「衆議院解散のラヂオニュースがあった」と触れられています。

また，3月16日に自由党広川派13人も離党し，分党派自由党に合流し，18日に分党派自由党は総裁に鳩山一郎を選出し，自由党は吉田派と鳩山派（衆議院39名）に分裂し，総選挙が戦われることになりました。[16)]

さて，また総選挙（第26回）です。先の総選挙から5ヵ月しかたっていません。前回落選の中村純一が再び立候補するかどうか，亀太郎の身辺も慌ただしくなりました。

3月17日，亀太郎は上阪・上京の道につき，19日に中村と会談です。「九時半青山高樹町に中村純一君を訪問して同君の立候補問題に就き意見を交換」。翌20日も薬師神岩太郎（前回の選挙で3区から共に落選）を交えて意見交換です。22日にも中村宅に武知勇記（衆議院議員）が訪問し，意見交換です。しかし，結局，中村は立候補しないことになりました。自由党愛媛支部の主流は，3区では，新人の県議山本友一（県会議長）を擁立し，そのため中村は断念させられたようです。23日には，佐々木長治（自由党愛媛県支部の支部長），武知，そして山本友一が中村宅を訪問し，中村に立候補断念を迫ったものと見られます。23日の日記に「朝，武知君，又昨日来京の佐々木長治君からの電話があり，中村立候補の起否に就き話したが，有利の形勢とも云い難い。九時半宿を出て……十一時過中村君方を訪ふた。門前で佐々木，武知，山本友一，浅田仙吉の諸君の自動車で辞去するに遇ひ，山本君，佐々木君より挨拶があったが，入って中村君に聴くと右諸君と話しの結果，今回は中村君断念，宇和島一本化の意味で病中の薬師神君も立たず，山本君の立候補を援助することに決めた由，少し中

16）内田『日本議会史録　4』279～284頁。升味準之輔『日本政治史　4』196頁。

村君の決意が弱過ぎた様な気がする。……予は五時半旅館に帰り，今夜出発の用意をした処へ電話が掛り，永田町首相官邸下瓢亭に於ける県人の会合に顔を出した。一座は佐々木，武知，山本諸氏の外，上京中の井部，井原，浅田の諸県議で，山本君立候補援助の申合があり，記念撮影して宴会に移ったが，予は八時辞し，龍名館で手荷物を取った儘，八重洲口の乗車口へ出て帰郷の途に就いた」とあります。中村立候補断念は亀太郎にとって不満だったと思われます。

さて，3月24日に選挙の公示がなされ，4月19日に衆議院選挙が行われることになりました。愛媛県の1区（定員3）では吉田自由党が2人（現職の関谷，武知），鳩山自由党が1人（岡井藤四郎），改進党が1人（現職の菅太郎），社会党が1人（新人の中村時雄，右派）を，2区（定員3）では吉田自由党が3人（現職の砂田，越智と元職の小西英雄），改進党が1人（元職の村瀬宣親），社会党が1人（現職の安平鹿一，左派），共産党が1人（門屋功）が出ました。亀太郎の属する3区（定員3）では，吉田自由党から4人（現職の高橋英吉，今松治郎，明礼輝三郎と新人の山本友一），改進党から1人（毛利松平），社会党から1人（元職の井谷正吉，右派）が出ました。3区で定員3であるのに，自由党から4人も出るとは異常ですが，地盤が違い，地域エゴのためです（高橋は西宇和郡，今松は北宇和郡，明礼は喜多郡，山本は宇和島市が地盤）。

3月25日，亀太郎は，中村の支持者を集めて，中村断念の説明をしています。「午后中村と近森へ行き，夜，中村で近森，武田，柴田，上田亮三の諸君と会見して，東京での事情，中村君出馬見合せの経緯を報告した」。近森は近森汎で追通の郵便局長，武田は武田儀久，柴田は柴田芳久，上田亮三は市会議員です。

宇和島の自由党は山本友一の応援です。亀太郎も一応支援ですが，あまり気乗りしていません。選挙記事は，3月27日「午前，会社に出勤。宅に向井三治，上田宗一の両君来訪。午后二時から蔦屋に於ける自由党宇和島部会の会合に顧問として出席した。山本候補者の挨拶があり，予も一言して，四時散会」，29日「山本選挙事務所へ行き，正午から赤松勲君と共にときわで会食。中村君のことなど話して，午后二時，別れた」等にとどまっています。

4月19日が投票日です。「衆議院議員選挙の投票日であるから，和霊小学校へ行って投票をし（た）……夜，柴田君来訪。今回の投票は即日開票が行はれるから，夜に入って全国の開票状況がラヂオ放送せられ，当選者の判った府県もあった」。

4月20日に当選者が判明しました。県下の選挙結果は，1区では，中村時雄（社会），関谷勝利（自由），武知勇記（自由）が当選し，菅（自由），岡井（改進）が落選です。2区では，安平鹿一（社会），越智茂（自由），村瀬宣親（改進）が当選し，砂田（自由），小西（自由）が落選・共倒れです。3区では井谷正吉（社会）5万2,921票，山本友一（自由）4万5,925票，高橋英吉（自由）4万0,396票で，この3人が当選し，次点今松（自由）3万8,394票，以下，明礼（自由）3万4,941票，毛利（改進）1万2,010票です。現職の今松，明礼共に落選です。県下では，自由党5，社会党3（左派2，右派1），改進党1となり，自由党の後退，社会党の躍進が特徴です（社会党は3区ともトップ当選）。亀太郎は今回の選挙にはあまり気乗りがしなかったようで，日記も「朝五時のラヂオで全国の半数以上の当選者が判明したが，愛媛県第三区は井谷正吉（社右），山本友一（自），高橋英吉（自）の三君が当選し，今松治郎君は次点となった。午前中，中村君来訪。又，外出して，山本友一君事務所へ当選祝に訪問し（た）」に止まっています。

全国的の選挙結果は，吉田自由党199，鳩山自由党35，改進党76，社会党左派72，社会党右派66，労働農民党5，共産党1，諸派1，無所属11で，吉田自由党は過半数を大きく割り，後退，鳩山自由党も，改進党も後退し，他方左右社会党，特に左派が躍進しました。また，いわゆる大物政治家が落選したのも特徴でした（自由党の前田米蔵，砂田重政，今松治郎，鳩山自由党の広川弘禅，改進党の楢橋渡，右派社会党の松岡駒吉等）。

(2) 参議院選挙（4月24日）

総選挙の5日後の4月24日に第3回参議院選挙も行われました。

愛媛県では，社会党が左派の湯山勇（県教組委員長）を，自由党は堀本宜実（自由党愛媛県支部前幹事長）を候補にして，保革一騎討ちで戦われました。この愛媛の参議院選挙は激しかったのですが，亀太郎は余り関心がなかったようで，当日の日記に「参議院議員選挙の日で，朝，和霊校へ投票に行った」と記されている程度です。結果は湯山25万6,059票，堀本24万0,558票で，1万5,000票程の差で，社会党左派の湯山が当選しました。久松知事が湯山を応援したのも湯山勝利の一因でした。[17] 自由党はまたまた敗北です。

なお，総選挙後の中央政界ですが，招集された国会で，5月19日，吉田がまた首班に指名され，21日第5次吉田内閣が誕生します。しかし，自由党の少数与党単独内閣でした。そのため，吉田は政権維持のため，改進党や鳩山自由党と妥協・連携せざるを得ず，改進党・鳩山らの改憲・自衛軍創出の主張をいれていきます。まず，53年9月の吉田・重光葵会談では，保安隊を自衛隊とする合意がなされ，11月に吉田・鳩山会談では，鳩山の自由党復党と引き換えに憲法改正調査会と外交委員会の設置の合意がなされています。

この結果，鳩山自由党の大半が自由党に復帰しています。しかし，反吉田派の急先鋒・党人派の三木武吉，河野一郎ら8名は合流せず，残留し，12月9日に「日本自由党」を結成しています。[18]

(3)　愛媛県政関係

1953年（昭和28）1月8日，愛媛県の自由党は県自治会館で党大会を開き，支部長に佐々木長治を再任し，副支部長に立川明(県議)，稲本早苗，魚本義若，幹事長に井部栄治（県議），総務会長に赤松勲，政調会長に白石春樹（県議）を選出し，再び県議主導の体制としています。

だが，前述の4月の衆議院選挙・参議院選挙での敗北は，自由党愛媛支部に打撃を与えました。6月20日，佐々木長治支部長は引責辞任している(後任の

17)『愛媛県議会史　第5巻』，今井『前掲書』90～101頁。
18) 内田『前掲書』299～302頁。

支部長は，代議士越智茂が選出)。

自由党は反久松県政の態度を明確にし，対決・反撃していきます。それが，社会党の推薦を受けている副知事の羽藤栄市の追い落とし・首切りでした。9月29日の県議会で，自由党側は「副知事廃止条例」を提案し，怒号の中で39対13で可決しました。全国でも例がありません。それに対し，久松知事は11月20日に条例可決を違法だとして，県議会を相手に提訴し，他方，議会側も12月18日に応訴することを決め，泥沼化の形相を呈していました。そこで，県の財界首脳達，末光千代太郎（伊予銀行)，武智鼎（伊予鉄)，平田陽一郎（愛媛新聞社)，井川伊勢吉(大王製紙)，井関邦三郎(井関農機)，白方大三郎(白方機織)の6人が調停に乗り出し，行政訴訟を取り下げる，廃止条例を公布する，羽藤の身の振り方は調停者が善処する，財政事情が好転すれば副知事制は復活するなどというものであり，久松にとって到底飲むことが出来ないものであったが，結局財界の圧力によって，屈伏し，12月25日に飲まされています。そして，これを契機に，革新勢力を基盤にしていた久松県政は自由党の県政に転換・変質していきます。[19)]

(4)　その他―裁判所の調停委員―

亀太郎はこの年の1月，裁判所の調停委員に就任しました。追放解除による最初の公職です。1月21日「三時から常盤食堂に於ける調停委員懇親会に出席。従来の委員と予等新顔の委員，又判事連中と会食して，五時過散会の後，帰宅した」。調停委員会は大体1ヵ月に2～3回の割で会合を開き，調停に当たっているようです。例えば，2月9日「午前九時，裁判所へ調停委員として出頭し，判事に会った上，委員の松本千吉氏と共に家屋明渡請求事件の調停に当った。正午過，未解決の儘散会。来る二十三日再会の筈である」，2月23日「午前九時から二宮卓，松本千吉両君と共に元結掛へ行って，調停事件の家屋を見た上，

19) 今井『前掲書』108～111頁。『愛媛県議会史　第5巻』603～605頁。

裁判所で関係双方の意見を聴いて調停を行ひ，正午成立した。午后，松本君方へ寄って謡曲の復習をして貰ひ，四時帰宅」，3月9日「朝，会社へ出て，九時から裁判所の調停委員会に出席し，十一時未解決で閉会」，3月14日「午前九時から裁判所の調停委員会に行き，九日分の案件解決して十時過に了った」等々。

第4章　1954年

1954年(昭和29)，亀太郎71歳の年です。経済界は不況です。政界は吉田政権が続いていますが，政権末期です(12月7日に吉田内閣総辞職)。この年，亀太郎に翌年予定の宇和島市長選挙に出馬の要請があり，一時心も動いたようですが，結局断り，「浪人中」の甥の中村純一に要請・決定しています。

(1)　中央政界のこと

吉田自由党内閣(第5次)は，本年初め再開された第19国会に，警察法案(国家地方警察および市町村自治体警察を廃止して，都道府県警察を設ける，中央に警察庁を設ける等警察行政の中央集権化)，教育二法案(義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する法案，教育公務員特例法の一部を改正する法案)，防衛二法案(防衛庁の設置，自衛隊法案)，MSA関係4協定(日米相互防衛援助協定など）などの悪法を次々と上程し，保革対決のもと（しばしば乱闘)，強行採決しています。

これらへの亀太郎の論評はほとんどありませんが，7月1日自衛隊の発足，新警察法の実施については記事があります。「保安隊が自衛隊として発足し，地区警，自治警の二本立てが廃されて，新警察法の実施される日であるから，予の生活様式も一新して，余り囲碁に耽らず，勤勉性を取戻したいと考へる」。この記事から見ると，自衛隊発足で，身が引き締まっていることが判ります。

また，本国会で造船疑獄事件が暴露され，自由党幹事長の佐藤栄作が受託収賄罪に問われ，それに対し，犬養健法務大臣が指揮権を発動しています。

これらにより，批判にさらされ，吉田政権は末期です。そして，又々，自由党内部で対立が始まります。7月3日，自由党の岸信介，石橋湛山，改進党の芦田均らが新党結成準備会を結成しました。そして，彼らが全国遊説を始め，その岸が8月24日来宇し，融通座で新党遊説演説会を開いています。亀太郎の岸らの行動に対するの論評はありませんが，この演説会に参加しています。「七時から融通座に於ける憲法調査会長岸信介氏の新党遊説演説会に入場し，同氏へも一寸会ふて挨拶をした」。

9月19日に鳩山・重光・三木・河野・岸・石橋の6者会談で反吉田新党結成が合意され，11月1日，新党結成準備会は委員長に鳩山一郎を決定しました。そして，24日に，自由党内の鳩山派，岸派，改進党，日本自由党が合同し，日本民主党が結成されました。総裁は鳩山一郎，副総裁は重光葵，幹事長岸信介，総務会長三木武吉，政調会長松村謙三です。これにより，日本民主党は120名となり，自由党は185名に減少，左派社会党72名，右派社会党61名，その他22名となりました。愛媛では，1区の武知勇記（自由党）が民主党入りです。民主党の成立にかんする亀太郎の論評はありませんが，鳩山民主党の支持ではなく，あくまで主流派の自由党（吉田）支持のようです。

12月6日，日本民主党と左右の社会党の3党が吉田内閣不信任案を提出しました。不信任案が可決される情勢となり，吉田はあくまで解散を指示したが，自由党内の反対にあい，出来ず，遂に翌7日吉田内閣は総辞職しました。[20)]

12月9日の国会で首班指名選挙があり，鳩山一郎が緒方竹虎（吉田の後を受け自由党総裁）を破り，当選しました。それは民主党の議席は少なかったものの，左右社会党が翌年3月上旬までに総選挙を行うとの条件で鳩山首班指名に投票したためでした。そして，12月10日，鳩山民主党内閣が誕生しました。鳩山は1946年5月の公職追放以来，苦節8年で，ついに念願の政権奪取です。そして，この鳩山内閣には重光葵（外相），安藤正純（文相），河野一郎（農相），

20）升味準之輔『日本政治史　4』202～205頁。

石橋湛山（通産相），武知勇記（郵政）等，公職追放解除組が6割も占めています。[21] 10日の亀太郎の日記に「鳩山内閣成立し，武知勇記君が郵政大臣となったので祝電を打った」とあります。亀太郎は主流派の自由党支持ですが，律儀でした。

(2)　愛媛県政関係・来春の知事候補のこと

1954年（昭和29）1月26日久松知事は，副知事廃止条例取り消しの行政訴訟を取り下げた。それに対し，社会党ら革新側は3万7,371人の署名を集め，副知事復活の直接請求を出したが，2月26日の県会で否決され，翌27日羽藤栄市副知事は辞職しています。以降久松県政は革新側から保守本流の自由党側に完全転換です。

3月14日，自由党愛媛県支部は大会を開き役員を改選し，支部長に越智茂（衆議院議員）を再任，幹事長には白石春樹（県議）が新しく選出されています。そして，早くも，来春の知事選が話題となっています。

社会党は，8月，前副知事羽藤栄市を候補として擁立しました。

他方，白石らの自由党の県議団は久松再選で行こうとの考えでした。しかし，前回出馬し，敗北した自由党の長老佐々木長治（前自由党支部長）が強い意欲を示し，9月立候補を表明しました。自由党は又々分裂の形相です。愛媛県支部は弱り，長老の砂田重政に斡旋を依頼し，11月末に佐々木を説得したが，佐々木の決意は固く，失敗。その後12月5日，支部長の越智茂らが中央の緒方竹虎，林譲治，大野伴睦，池田勇人らの手紙を携えて説得し，ついに佐々木も諦め，保守一本化に涙を飲んでいます。前回の知事選では白石は佐々木を担いで，青木県政打倒また反久松で戦ったのに対し，今度は白石らに裏切られたわけで，佐々木は大ショックだったと思われます。

かくして，知事選は久松・羽藤の保革一騎討ちとなります。そして，久松は

21）柴垣和夫『前掲書』91～92頁，増田弘『政治家追放』340～341頁。

年末の12月22日，機先を制して，辞表を提出し，来年1月の知事選のために攻勢に出ました。また，年末の12月28日，自由党県支部幹事長の白石春樹らは，知事選を真近に控え，保守分裂を避けるべく，県政同志会を結成するなどし，年を越しています。[22)]

(3) 宇和島市長立候補問題

3月31日に，来年に迫った宇和島市長選挙について早くも協議しています。「五時から今朝からの打合せにより浦瀬，松浦，柴田，武田，石崎，西山の諸君来会の上，来年の市長改選に就き意見を交換した。夕食を共にして九時散会した」。浦瀬らは，亀太郎に市長選への出馬要請をしたものと思われます。

4月4日にも，同志らと協議しています。「午前九時から柴田，武田，石崎等の同志諸君十人餘り来集，協議して，午后一時過散会した」。

5月22日，亀太郎は伊吹町の有志らからも，市長立候補を要請されていますが，即答を避けています。「七時半から来訪の伊吹町の有志代表者八名の人々に接した。来春市長選挙に予の立候補を慫慂されたが，目下の所確定的には考へて居らぬ旨答へて置いた」。

11月8日，亀太郎は上京の道につき，11月10日に中村純一を訪問し，中村の衆議院または市長立候補の意思を訊ねています。「七時青山高樹町の中村純一君を訪ふて，宇和島の政状を説明し，衆議院或は市長選挙立候補に対する意見を交換したが，中村君の決意は不明瞭であった」。12日，13日も中村を訪問していますが，結局，純一の態度不明のまま，13日に帰国の道についています。

その後，11月23日，中村と電話で話し，純一は市長選立候補に稍やる気を見せています。「夜，中村へ行って，東京からの純一君の電話を聴き，同君の市長立候補に就き，稍其気になりかけた由の話があった」。

11月24日に，亀太郎は中村に手紙を書き，26日に再び中村と電話で話して

---

22) 今井『前掲書』112～117頁。

います。

12月1日，中村純一が帰国し，翌2日亀太郎と会っています。「朝，会社に出て，十時から中村に行き，昨夜東京から帰郷の純一君に会った。又石崎，田中又雄，近森の諸君に会った」。

12月8日，漸く中村純一の市長選立候補の意思が固まったようです。「朝，中村純一君来訪，吉田内閣昨日総辞職となり，近く選挙もないので市長選に立候補の意志略確定した旨話があった」。このように，吉田内閣総辞職で，総選挙が当面なくなったのが直接の契機だったようです。

中村決断を受けて，亀太郎は，12月18日，自分に立候補するよう応援してきた同志を集め，辞退の了解と中村支援を要請しています。「四時から市長選挙立候補に就き，今春以来，予に応援の側にある諸君十余名を招いて協議した。来会者は浦瀬，武田，近森，上田，石崎，牧野，浜田，西山，松浦，川野の十人で，今回中村純一君が明年の市長選に立候補のことに略確定したるにより，予の立候補は見合せたき旨事情を具して相談の結果，諒承を得た。一同晩餐を共にして九時散会した」。

1954年の年末，亀太郎は市長選挙立候補問題などを回顧して，次のように述べています。「春以来明年の市長選挙に立候補を慫慂させられて居り，一般に其空気も出て自分も其意志であったが，四月以来考を変へて立候補せぬことに内心決めた。其結果年末には中村を立てることに形勢を順致した」。

(4) 公職関係

亀太郎は本年も裁判所の調停委員を続けています。3月10日「十一時から調停委員の協議打合会合に商工会議所に出席する。松山地方裁判所其他の判事と地方の調停委員間に指示協議があって，昼食を共にし，午后二時終了した」，3月11日「十一時裁判所の調停委員会に出席して正午迄に成立帰宅した」等々。